

(海外) インターンシップ報告書

2019 年 11 月 2 日提出

氏名	永田矩之
所属	獣医内科学教室
学年	D4
活動先名	ユトレヒト大学、オランダ
期間 ① (出発日―帰礼日) ② (インターンシップ 実施開始日―終了日)	① 2019 年 9 月 20 日-10 月 21 日 ② 2019 年 9 月 23 日-10 月 18 日

■活動目的及びインターンシップ先を選択した理由

臨床獣医師、研究者および教育者としての自らのキャリアパスを見据えて、世界でトップクラスの獣医科大学で、臨床獣医療、臨床研究ならびに獣医学教育の実践を経験することを目的とした。具体的には、獣医内科学の権威の元で臨床活動および研究活動を学ぶこと、ヨーロッパおよび北米組織から認証を受けた大学における教育システムを知ること、獣医内科学の権威との国際的な人脈を作ることを目的とし、申請者の研究分野である獣医内科学において臨床と研究を世界トップレベルの質で実施していることに加え教育に関しても世界水準で行っているユトレヒト大学をインターンシップ先として選択した。

■活動内容・成果

ユトレヒト大学はオランダ国内で唯一獣医学部を持つ大学であり、ユトレヒト大学動物病院には国内の難治性疾患症例が多数来院するとともに教育病院としての役割も果たしている。本インターンシップでは、ユトレヒト大学動物病院コンパニオンアニマル部門内科診療科長である Dr. Kooistra にホストを依頼し、主に動物病院の内科診療科の見学を行った。内科診療科の各科（内分泌科、泌尿器科、循環器科、消化器科、皮膚科、産科、血液科）の診療、内科入院管理、ICU 管理に参加し、当該施設における診療と臨床研究の実践および学生教育を詳細かつ身近に経験した。また、動物病院に併設されている診断ラボとゲノミクスラボを見学するとともに、現在および将来の研究についてディスカッションを行った。



ユトレヒト大学獣医学部のシンボル
ライオンとその肢からトゲを抜く男性の
像で、アフリカで初めて獣医師が誕生した
瞬間を表している。

ユトレヒト大学動物病院内科診療科では、European Collage of Veterinary Internal Medicine (ECVIM) に認定された専門医と数人のレジデント（今回のインターンシップ中はほぼすべてのレジデントが夏期休暇中）および数人の学生で診療が行われている。内科診療科各科の1日の診察件数は決して多くはなく（およそ4-6件）、診療時間中の多くが専門医と学生のディスカッションに割かれている。診察前には、専門医が学生に鑑別疾患を必ず挙げさせ、問診と身体検査の結果から何の疾患が一番考えられるのか、どの疾患を鑑別すべきなのか、なぜこの検査が必要なのかなど、徹底的に話し合いが行われていた。2次診療施設として高度医療を提供するだけでなく、Teaching hospital として学生への教育を非常に重視している様子であった。



症例についてディスカッションする Dr. Kooistra と学生たち

専門医と学生たちが1頭1頭の症例についてとても長い時間をかけて話し合っている場面が最も印象的であった。

内科外来では、飼主への問診、身体検査および電子カルテの記載までのほぼすべてが学生によって行われていた。内科入院病棟においては、すべての入院動物には学生が担当につき、専門医の管理の下に処置を実施していた。本インターンシップで感じた日本との違いは、学生の診療参加が非常に実践的かつ高いレベルで達成されているという点である。Master course（6年制の後半3年間）の1年生（日本でいう4年生）が、自信を持って問診と身体検査を行い（問診はオランダ語なので何も聞き取れないが）、専門医に向かって堂々と意見を言う姿には驚いた。採血は基本的に診察室内で行われるが、専門医の判断で学生が飼い主の前で実施することもある。知識と基本的な動物の取り扱い



排泄のために入院動物を外に連れ出す学生たち

基本的に学生が入院動物を担当し、すべての処置を行う。学生たちは責任のある仕事も任せられていた。

Bachelor course（6年制の前半3年間）でしっかりと身につけているようであった。コンパニオンアニマル部門の Master course の学生は、約1年半の病院実習をこなしていた。この期間中、約20の診療科をそれぞれ1-2週間ローテーションで回っていく。また、コンパニオンアニマル部門の学生は、8週間のホースクリニックと6週間の産業動物クリニックの病院実習も行う。卒業研究は、3ヵ月から12ヵ月で選ぶことができ、病院実習の前後のどちらかで完成させる。各診療科が毎日開かれているわけではないが、病院実習にかかる時間が日本の大学よりも圧倒的に多く、卒業時には一人前の獣医師としてスタートを切れる準備を十分にできる環境が整えられていた。また、学生の志望によって選択可能なフレキシブルなスタイルを採用している点も興味深かった。ユトレヒト大学獣医学部は、1973年にアメリカ獣医学会（AVMA）およびカナダ獣医学会（CVMA）より、ヨーロッパでは初めて獣医学教育の国際認証を受けている。そのため、ユトレヒト大学獣医学部の卒業生はアメリカおよびカナダ

においても獣医師として働くことが認められている。これは、高い水準の教育を長年に渡り継続して実施していることの証である。本インターンシップを通じて世界基準の獣医臨床教育を学ぶことができ、日本の獣医臨床教育の課題を知るまたとない機会となった。

本インターンシップでは、内科診療科の中でも、特に内分泌科に関しては4週間全ての診療を見学させていただいた。内分泌科の診療は月曜日と木曜日の週2回のため、計8回の診療日、2人の内分泌専門医による診療を詳細に経験した。豊富な知識をもつ専門医として立場に加え、多くの臨床研究と基礎研究を精力的に行われている研究者でもあり、自分の理想とするこのような獣医内科専門医の診療に参加できたことは、自身が獣医師として成長する上で大変貴重な経験となった。

動物病院にはゲノミクスラボなどの研究ラボが併設されており、臨床症例をベースにした研究が臨床獣医師と研究者によって盛んに行われていた。インターンシップ中には、現在および将来の自分の研究について獣医内科専門医とゲノミクスラボの研究者から意見をいただくことができた。今回のインターンシップは、海外トップクラスの臨床医と研究者とのコネクションを確立する上で最良の機会となった。



動物病院（奥）に併設されているラボ施設
1階は薬局とカフェテリア、2階は診断ラボ、3階と4階は研究ラボになっている。臨床獣医師は頻繁にラボに赴き、診断や研究についてディスカッションしていた。

■今後のキャリアパスを考える上でどのようにプラスになったか。

申請者は博士課程修了後、大学教員になるという明確な目標を持っている。その理由としては、獣医療という分野において「臨床」「研究」「教育」に興味を持っており、この3つを高い水準で達成できるのが大学教員だからである。しかしながら、これまでの臨床経験の中で日本と世界の獣医療の間に明確な差があることを学んだ。今回のインターンシップを通して、海外トップクラスの獣医科大学の臨床と研究と教育を経験することで、日本の獣医療と獣医学教育の問題を把握することができた。4週間という短期間で学べる内容には限界があったが、今回のインターンシップは海外トップクラスの研究機関とのコネクションを確立する上で最良の機会であった。また、自分の理想とする獣医内科専門医に出会えたことで、目指すべき目標が明確になった。



左：今回のインターンシップでホストになっていただいたユトレヒト大学動物病院内科診療科長の Prof. Kooistra と
右上：4週間の間最も長く診療をご一緒させていただいた内分泌科の Dr. Galac と
内分泌学の世界的権威であるとともに素晴らしい人格者でもある2人の内科専門医の診療に参加できたことは、自身が獣医師として成長する上で大変貴重な経験になった。



右下：The 5thSaSSOH, 2017 招待講演者の Dr. Spee（左奥）、Dr. Spee の同僚で Geneticist の Dr. Steenbeek（左手前）、ブラジルからの留学生の Erisa（右奥）と Dr. Spee には2年ぶりにお会いすることができ、この間の研究の発展を聞くことができた。Geneticist である Dr. Steenbeek からは、現在の博士課程の研究について多

■後輩へのアドバイス

今回のインターンシップのきっかけとなったのは、The 5th SaSSOH, 2017 でした。その際に、ユトレヒト大学の Dr. Spee と知り合う機会に恵まれ、Dr. Spee に Dr. Kooistra への口添えを頂くことができました。また、Dr. Spee を招聘したのが指導教官であったこともあり、指導教官の全面的な協力もありインターンシップの申請から現地での活動まで大変スムーズに事が運びました。幸いなことに、現在の博士課程プログラムでは海外の素晴らしい研究者と知り合う機会が多くあります。自分の興味のある分野の研究者に出会った際には、積極的にコミュニケーションを取ることで、インターンシップ先としてだけでなく自分の将来に大きく関わる人物と知り合うことができると思われます。

準備に関しては、誰もが言うように早めに計画していくことが大事だと思います。自分の場合、動物病院で働かせてもらうことの許可（Work permit）を得るために必要な書類が多かったので準備に時間がかかりました。滞在先を探すのも苦労したので、早めに決めてしまうかキャンセルや変更できるところを抑えておくとも良いかもしれません。

最後に、キャリアパスを見据えた本インターンシップを経験することで、自分の将来の目標が明確になるとともに素晴らしい国際的人脈を築くことができました。このような貴重な機会を与えていただきましたリーディング大学院関係者の皆様、獣医内科学教室の皆様に深謝いたします。

指導教員確認欄	指導教員所属・職・氏名 獣医内科学教室 滝口満喜
---------	-----------------------------

- ※1 電子媒体を国際連携推進室・リーディング大学院担当に提出して下さい。
- ※2 インターンシップ先の担当者が活動内容を証明した文書（署名入り）を提出して下さい。
- ※3 本報告書はリーディングプログラムキャリアパス支援委員会で内容を確認します。その後、教務委員会で単位認定を受けることになります。

提出先：VETLOG

内線：9545 e-mail: leading@vetmed.hokudai.ac.jp